

オプション教材エニシダ 暗唱長文集



●暗唱の手順 1 日分

・ 1 日目は、まず、**1**の文章を30回音読します。最初の数回はゆっくり正確に「てにをは」などを間違えないように読みます。

正確に読めるようになったら、ある程度早口で棒読みで、句読点などであまり息継ぎをせずに読んでいきます。

イスにきちんと座って読むと読みにくい場合は、歩き回りながら読んでもかまいません。

お母さんやお父さんは、読み方の注意などは一切せずにただ優しく褒めるだけにしてください。

15回ぐらいでもう空で言えるようになることが多いと思いますが、できるだけ30回続けて読んでください。

なぜ回数を決めて繰り返すかという、と、「覚えられたらよい」という目標でやっていると、暗唱の教材が難しくなったときに、「難しいからできなくなった」ということになりがちだからです。「決まった回数を繰り返す」という目標でやっていると、難しい教材になっても同じように暗唱ができます。

30回音読しても暗唱できない場合は、もう10回音読してください。

これでその**1**の文章が暗唱できるようになります。

それでもできない場合は、暗唱の自習はいったん終了してかまいません。また機会を見てやっていきましょう。

●暗唱が難しいときは

暗唱のような短い時間の学習は、夕方にやろうとすると忘れてしまうことがあります。また、毎日同じようにやらないとできるようになりません。できるだけ、朝ご飯の前などに、家族のいる中でやるようにしましょう。

そして、暗唱を毎日やるのが難しい場合は、暗唱の自習はせずに、読書の方に力を入れていってください。

●暗唱の手順 1 週間分

- ・ 1 日目に、**1**の文章を暗唱できるようにします。
- ・ 2 日目は、**2**の文章だけを同じように30回音読し、暗唱できるようにしておきます。
- ・ 3 日目は、**3**の文章だけを同じように30回音読し、暗唱できるようにしておきます。
- ・ 4 日めは、**1**、**2**、**3**の全部通して、10回音読します。すぐに暗唱できなくてもかまいません。
- ・ 5 日めも同じように、**1**、**2**、**3**の全部通して、10回音読します。
- ・ 6 日めも同じように、**1**、**2**、**3**の全部通して、10回音読します。
- ・ 7 日めも同じように、**1**、**2**、**3**の全部通して、10回音読します。すると、**1**から**3**の全部の文章が暗唱できるようになります。

●暗唱の手順 1 か月分

- ・ 1 週目に、**1**から**3**の文章を暗唱できるようにします。
- ・ 2 週目は、もう**1**から**3**はやらずに、今度は**4**から**6**の文章を暗唱します。
- ・ 3 週目は、同じように、**7**から**9**の文章を暗唱します。
- ・ 4 週目は、**1**から**9**の文章を全部通して、毎日4回ずつ音読します。
- ・ すると、1 か月で**1**から**9**の文章が暗唱できるようになります。

●暗唱の活用

・ 暗唱のコツをつかむと、自分の好きな本の1部を暗唱したり、英語の教科書を暗唱したりできるようになります。また、覚えるつもりがなくても、物事が頭に入りやすくなります。

●こんなやり方もあります

暗唱が続けにくいときは、こんな方法もあります。（1）お母さんが読むのを聞かせてあげて親子で一緒に暗唱する、（2）子供が自分の声をICレコーダに吹き込みそれを聴く。いろいろ工夫してみてください。

「三月のものを再掲しています。」

1 夏の間、あんなにたくさん見かけたカエルは、冬にはまったく見かけなくなります。カメやヘビも、冬の間は見かけません。しかし、また春になると、姿を現すようになります。2 カエルにしてもヘビにしても、あんなに毛がなくてつるつるの体では、さぞ冬には寒いことでしょう。それに、冬の間は、エサにする虫などの生きものもとても少なくなります。3 それでは、こういう生物たちは、寒い冬をどうやってすごしているのでしょうか。

じつは、カエルやカメやヘビなどは、冬の間、冬眠といって、地面の中や池の底、木の穴など、比較的暖かそうで安全な場所にかくれて寝ているのです。4 カエルやヘビは変温動物といって、外の気温が下がってくると、自分の体温も同じように下がってしまいます。だから、冬になって気温が下がって活動できなくなると、冬眠してしまうのです。

5 この冬眠の間は、体の中に蓄えたエネルギーを使って生きていますから、エサを食べる必要がありません。息さえしなくても大丈夫なものもいるといいますから驚きます。6 息もせずに生きられるとはちよつと生意気ですね。こうして、まるで死んだように眠り続け、カエルのいなくなった世界は静まりかえるのです。

7 春になり、外が暖かくなってくると、眠っているカエルたちの体もいっしょに温まり、体温が上がってきます。すると、カエルたちの体は再び活動を始め、「ああ、おなかがいっぱいなあ」と、外に出てきます。8 そのころには、エサたちも冬眠から目覚めたり、新しく生まれたりしてたくさんいるので、おなかいっぱい食事をすることができます。

「眠れる森の美女」という、魔法使いに眠らされたお姫様の話があります。

9 お姫様は王子様のキッテ長し眠りから目覚めます。カエルたちにとつては、春の暖かい太陽が、まるで「王子様のキス」のように思えることでしょう。カエルたちは、太陽の暖かさで次々と我に返るのです。0

言葉の森長文作成委員会（㍶）

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 (

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 (

【1】母Eの土曜Eに隣の家のサトシカにくの家に遊びにきました。サトシにはアリサという名前の妹がいます。アリサとお母さんはバレエの練習があるので、サトシはお留守番です。

最初に、ぼくたちはベイブレードで遊びました。【2】サトシはたくさんベイを持ってきます。トイザラスに行くといつも売り切れになっている珍しいベイも持っています。ベイの数では負けているけど、ぼくは頑張りました。対戦結果は引き分けです。

そのあとは、一丁目公園に行くことにしました。【3】お母さんは、

「今日は寒いからお家の中で遊んだら。」

と少し困った顔をして言いました。ぼくは、

「大丈夫だよ。行ってくるね。」

と、玄関を出ました。外は寒くて、風がぴゅうぴゅう吹いていました。【4】やっぱり家の中で遊べばよかったかなあとthinkながら、ぼくはポケットに手をつっ込みました。一丁目公園には、タケシとシンジが

いました。ぼくたちはいっしょになって鬼ごっこをしました。たくさん走り回ったのでまるで風呂上りのように体がぼかぼかになりました。

【5】家に帰るとちようど三時のおやつの時間でした。

「みんなで百円ショップに行って好きなものを買っておいで。」

と、ぼくのお母さんがお財布を出しながら言いました。サトシとぼくの双子の妹のカスミとヒカリは百円ずつもらいました。ぼくだけ二百円もらいました。【6】どうしてかという、お母さんが、

「お母さんの分もひとつ買ってきてね。」

と、こっそり言ったからです。

ぼくの家を出て坂を降りていくと左側に百円ショップがあります。ぼくは四個で百円のコーナーを選びました。【7】買ったものは、

どらチョコとジュースとベビースターとあわです。あわはラム

99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 (

ネのお菓子です。それを食べると、口の中は泡だらけになります。まるでモリアオガエルのたまごのようです。サトシもぼくの真似をしてあわを買いました。【8】二人で口を大きく開けてカスミとヒカリに見せたら、

「うわあ、まずそう。」

と逃げられました。

「おいしいよなあ。」

と、ぼくとサトシは顔を見合わせて笑いました。まだ食べたことがないから、味が分からないのだなあとぼくは思いました。【9】お母さんにはチョコレートのお菓子を買ってきてあげました。お母さんは、

「ありがとう。このお菓子、大好き。」

と喜びました。ぼくはいいものを買ったなど嬉しくなりました。楽しい土曜日でした。【0

(言葉の森長文作成委員会 〇)

成長の途上に必要な無駄—遊びについて

社会人になると、無駄のない能率的な行動が要求されるようになります。そういう状態に慣れると、つい子供に対しても能率を要求してしまいます。

しかし、大人にとって必要なものと、成長期の子供にとって必要なものは、おのずから異なります。大人にとって大事なものは、結果であり勝敗です。子供にとって大事なことは、結果ではなく過程であり、勝敗ではなく向上や成長なのです。

そのことが最も特徴的に表れるのが遊びです。

子供たちは、大人から見れば意味のないものによく熱中します。例えば、電車の名前を覚える、酒瓶のふたを集める、秘密基地を作る、などです。大人の能率から考えれば、電車の名前を覚えるよりも県庁所在地でも覚えていた方が役に立つと言いたいところですが、ところが、大事なものは結果ではありません。

一見無駄に見えることに熱中しているときに、子供は、集中力や持続力や自主性や思考力を育てているのです。言わば、将来大きな木になるために、地中に深く根を張っている最中なのです。

無駄を排して見た目の結果を重視するのは、子供のエネルギーを、根を張ることよりも花を咲かせることに向けてしまうことにつながります。

不思議なことに、社会に出てから活躍している人の多くは、子供のころ、朝から晩まで熱中して遊んだという経験を持っています。決して、子供のころからこつこつと倦（う）まず弛（たゆ）まず同じペースで努力して大人になったというわけではありません。

しかし、現代は、子供が熱中して遊びに没頭できる機会が少ないのも事実です。子供が地域で遊べるような環境を作ること、これからの教育の重要な役割になってくると思います。

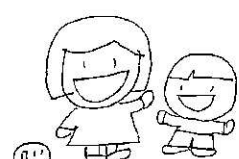
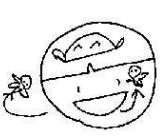
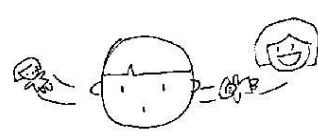
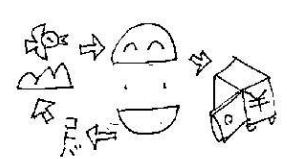
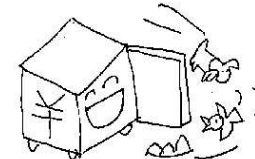
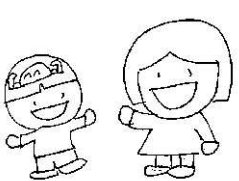
親が心がける第一のことは、まず小学校低中学年のころに勉強をさせすぎないということです。勉強は必要ですが、学年が上がるにつれて徐々に増やしていくものです。そのうちに、中3や高3の受験期になれば、子供は親が止めても朝から晩まで勉強するようになります。そういう時期になるまでは、ほどほどにやっておくぐらいがいいのです。

第二は、親はいつも、子供が楽しく笑顔でいられるように心がけることです。真面目な親ほど、小言を言ったり叱ったり注意したりすることによって子供が成長するように考えがちですが、子供は楽しく笑っているときにいちばんよく成長します。

子供の教育にとって大事なことは、大人の生活とは違ってある種の強制と無駄であり、その具体的な形が読書と遊びということになります。更に、その読書と遊びを補強するものが、親の笑顔に支えられた明るい家庭生活なのです。

暗唱の仕方



暗唱の意義	 子「どうして、暗唱するの」 母「あーん、しよれはね」 「……」	 自分の音読した声が耳に入ると、	 脳が、「これはのどと耳の両方から来ているから大事な言葉だ」と思う。
 だから自分の言っていないことは、右から左に抜けることも多い。 母「勉強してるの？」	 同じ言葉をくりかえしている と、言葉がイメージとなって 脳の金庫に保管される。	 しかも、イメージは、いくら つめこんでも大丈夫。 「パクパク」	 母「そして、脳が丈夫になるのよ」 子「そうなのう」

●暗唱のコツ

暗唱のコツは、ただ回数をくりかえして音読することだけです。
最初は正確に読み、慣れてきたら、できるだけ早口で滑らかに音読した方が早く暗唱できるようになります。
暗唱をする時間を、朝ご飯前の10分間などと毎日ほぼ確実にできる時間帯に決めておきましょう。
暗唱は覚えることが目的ではありません。文章を自分の体の一部となるようにすることが目的です。歌を歌う練習をするつもりで暗唱していきましょう。

■暗唱すると

●1、頭がよくなる

思考力の骨組みとなる語彙や考え方が自分のものになるからです。

●2、作文がうまくなる

語彙や文のリズム感などの表現力が自分のものになるからです。

●3、勉強ができるようになる

複雑なものを覚えることが苦にならなくなるからです。

■暗唱の成果はどんなところに

●江戸時代の寺子屋教育の基本は暗唱

寺子屋教育の基本は、百字の文章を百回読むことでした。この勉強法によって日本は当時世界一の識字率を達成していました。
(江戸時代の日本の識字率70?80%、同時代のヨーロッパの先進国の識字率20~30%)

●ノーベル賞の湯川秀樹も小1から暗唱

湯川秀樹と3人の兄弟は、それぞれ5、6歳から四書五経の素読をさせられました。そして、全員が学者になりました。
そのときの勉強法は、論語を漢字のまま意味もわからないまま音読し暗唱するという方法でした。
(芳樹(兄、冶金学者、東大教授)、茂樹(兄、歴史学者、京大教授)、環樹(弟、中国文学者、京大名誉教授))
しかし、湯川秀樹は後年、素読は役に立ったが、読めないし意味も分からない文章を読むのは苦痛だったと述べています。

●暗唱を生かした著名人

暗唱を自分の実際の勉強に生かした著名人には次のような人がいます。

- 貝原益軒（1630-1714）……81歳のときに著した「和俗童子訓」で四書五経を毎日百字百回暗唱するという勉強法を提唱しました。益軒の影響は日本全国々に及び、江戸時代の日本の教育の大きな方向を決定しました。暗唱は子供だけでなく、大人にとっても価値があると述べています。
- 塙保己一（1746-1821）……盲目でありながら当時日本全国に散らばっていた600冊以上の学術書を編纂するという偉業を成し遂げました。その伝記は、ヘレン・ケラーにも大きな影響を与えました。18歳のとき般若心経を毎日100回1000日間暗唱するという誓いを立て実行しました。また、晩年まで折に触れて暗唱をしていました。
- シュリーマン（1822-1890）……独学で十ヶ国語以上をマスターしトロイアの都を発掘しました。そのときの勉強法が、外国語を辞書にも文法書にも頼らず大声で音読し暗唱するという方法でした。生まれつき弱かった記憶力が、この勉強法で改善したと述べています。
- 本多静六（1866-1952）……林学博士。暗唱の勉強法で東京農林学校（今の東大農学部）を首席で卒業しミュンヘン大学経済学博士号を取得しました。大学1年生のとき数学で赤点を取りましたが、一念発起し数学も丸ごと暗唱するという方法で学年トップになりました。子供時代、家の仕事を手伝いながら文章を暗唱するという勉強法をしていました。大学には作文の点数がよくて合格できたと述べています。
- 野口悠紀雄（1940-）……経済学者。自身の中学高校時代の経験から英語の勉強法として音読暗唱を提唱しています。高校時代、英語は教科書をただ音読するだけで好成績を維持し東大工学部に合格しました。しかし、そのように単純な方法なのに実践する人が少ないと述べています。

■ 暗唱の例

●長文の見本

2週の1日目30回

2週の2日目30回

2週の3日目30回

2週の4日目10回

2週の5日目10回

2週の6日目10回

2週の7日目10回

4週の1日目4回

4週の2日目4回

4週の3日目4回

4週の4日目4回

4週の5日目4回

4週の6日目4回

4週の7日目4回

読まなくてよい

暗唱用長文 きょうりゅうのたまご (小1・小2)

1週の1日目30回

1週の2日目30回

1週の3日目30回

1週の4日目10回

1週の5日目10回

1週の6日目10回

1週の7日目10回

3週の1日目30回

3週の2日目30回

3週の3日目30回

3週の4日目10回

3週の5日目10回

3週の6日目10回

3週の7日目10回

● 1 週目の読み方

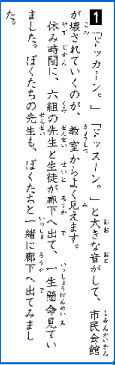
文の出だしに **1・2・3・4・5・6・7・8・9・0** という番号がふつてあります。
1 週間 7 日間、長文の暗唱をする場合、**1** が 1 日目の 1 0 0 字、**2** が 2 日めの 1 0 0 字、**3** が 3 日目の 1 0 0 字です。
そして、4 日目、5 日目、6 日目、7 日目は、**1・2・3** の 3 0 0 字を通して暗唱します。

● 2 週目、3 週目、4 週目の読み方

同じようにして、2 週目は、**4・5・6** を暗唱します。3 週目は、**7・8・9** を暗唱します。
そして、4 週目は、**1・2・3・4・5・6・7・8・9** の 9 0 0 字を通して暗唱します。**0** から先は暗唱しません。

● まず 1 週目の 1 日目

1 の 1 0 0 字を 3 0 回音読します。



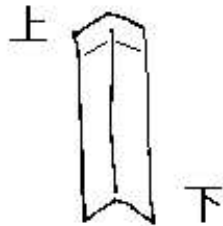
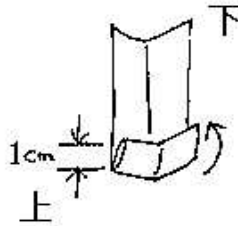
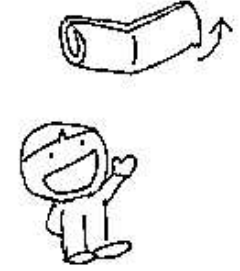
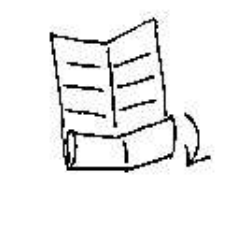
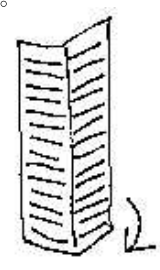
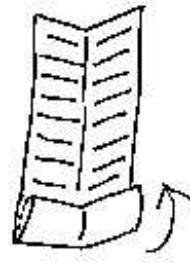
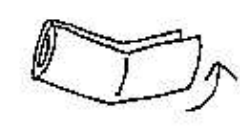
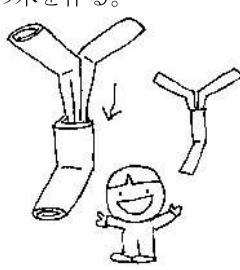
● 紙を折って数える暗唱法

紙を折って数えるお t、3 0 回の音読がやりやすくなります。
A 4 サイズの紙を次のように切ります。

1 日目	2 日目	3 日目	4 日目
			5 日目
			6 日目
			7 日目

● 30回読むとき

1日目の4分の1のサイズの紙を図のように折って、1回目の暗唱に使います。

1日目	1000字の暗唱用は、長い方の紙を縦に谷折に二つに折る。そのあと上から山折りに折る。 	1センチぐらいに折っていく。 	15回ぐらいで全部折たためる。 	1000字を1回読むたびに1回ずつ開いていく。 
全部開いたら15回読んだことになる。これで約5分。 	続けて読みながら、今度は折りたたんでいく。 	全部折りたたんだら、30回読んだことになる。これで約10分。これを大枝と呼ぶ。 	3日間3本の大枝をY字型に組み合わせて暗唱の木を作る。 	

● 1週目の2日目、3日目

2日目には**2**の長文を同じように30回音読します。3日目には**3**の長文を同じように30回音読します。

2 「ドッカン。」「ガラガラガラッ。」「ドッカン。」「ガラガラガラッ。」市民会館が、ぼろぼろに壊れていきます。今度は、あの大きな石を、「ドッスン。」とこから落とします。すると、コンクリートのかなりが小さく砕けます。

2 そのうちに、四組の先生も生徒も出てきて、廊下の奥は、でいばいになりました。クリーンカーが、太い針金のロープに大きな石を小さくけて、一回振って、ドッカン。」と、市民会館の建物につけると、市民会館が落ちてきます。

● 1週目の4日目

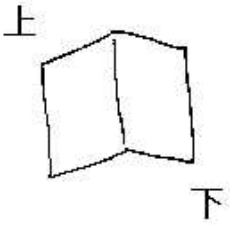
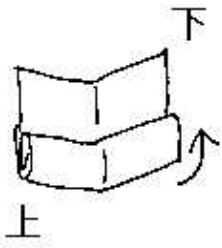
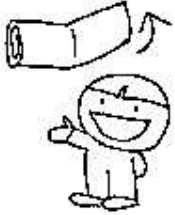
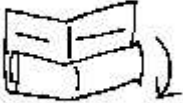
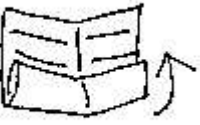
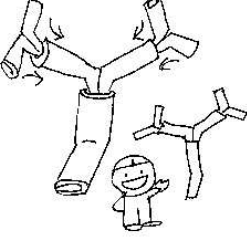
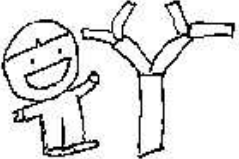
4日目には、**1・2・3**の3000字を通して10回暗唱します。

3 「ドッカン。」「ガラガラガラッ。」「ドッカン。」「ガラガラガラッ。」市民会館が、ぼろぼろに壊れていきます。今度は、あの大きな石を、「ドッスン。」とこから落とします。すると、コンクリートのかなりが小さく砕けます。

1 「ドッカン。」「ドッスン。」と大きな音がして、市民会館が壊れていくのが、教室から見えません。休み時間に、六組の先生と生徒が廊下へ出て、一生懸命見えました。ぼくたちの先生も、ぼくたちと一緒に廊下へ出てみましたが、そのうちに、四組の先生も生徒も出てきて、廊下の奥は、クリーンカーが、太い針金のロープに大きな石を小さくけて、一回振って、ドッカン。」と、市民会館の建物につけると、市民会館が落ちてきます。

● 10 回読むとき

300字を読むときには、4日目の16分の1のサイズの紙を図のように折って数えます。

	4日目からは、300字暗唱用の小さい方の紙を折る。 	1センチぐらいに折っていく。 	5回ぐらいで全部折りたためる。 	300字を1回読むたびに1回ずつ開いていく。 
全部開いたら5回読んだことになる。これで約5分。 	続けて読みながら、今度は折りたたんでいく。 	全部折りたたんだら、300字を10回読んだことになる。これで約10分。これを小枝と呼ぶ。 	4日間4本の小枝を、大枝の先にY字型にさす。 	1週間で暗唱の木が1本できる。 

● 2週目、3週目の暗唱

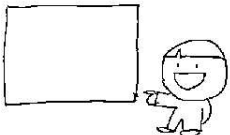
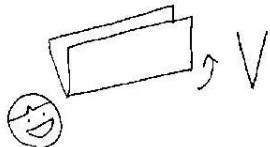
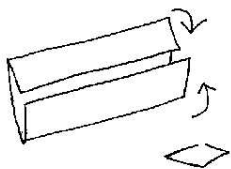
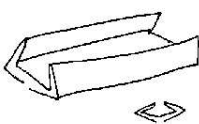
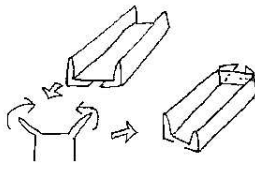
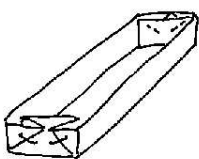
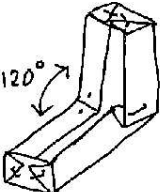
1週目に**1・2・3**の300字を暗唱できるようにしたあと、2週目には、同じように**4・5・6**を暗唱します。そのとき、**1・2・3**はもう暗唱しません。
3週目には、同じように**7・8・9**を暗唱します。そのとき、**1・2・3・4・5・6**はもう暗唱しません。いずれも、300字がすらすら暗唱できるようになったら、イメージ化で出だしの言葉を覚えておきましょう。

● 4週目の暗唱

4週目には、**1・2・3・4・5・6・7・8・9**の全部で900字を通して毎日4回暗唱します。
4回読むときは、指を折って数えます。
4回読んだら、暗唱の木を2本ほどきます。（そうすると、また次の月に使えます）

暗唱フォンの作り方

周囲が騒がしいときは、暗唱フォンを作って自分の声をしっかり聞きましょう。

●暗唱フォンシングル型 A4の紙を1枚用意します。 	1枚を二つに折ります。 	二つに折った線を基準に三つに折ります。 	裏返してまた三つに折ります。 
片側の端を箱を作るように折り立ててホッチキスで止めます。 	両側の端を同じように止めて長い箱を作ります。 	箱の真ん中あたりを折って120度ぐらいの角度にしてホッチキスで止めてできあがり。 	

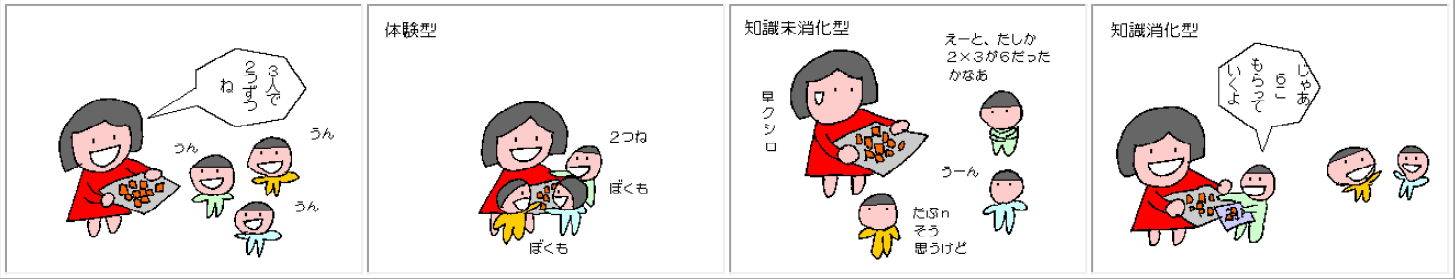
●思考力を育てる暗唱

記憶や反復や音読や暗唱が、理解や思考と相反するという考えを持つ人がいます。例えば、丸暗記という言葉には、自分で考えない、表面的な知識だけ、というニュアンスがあります。暗唱も、この丸暗記と同じようなものだと考えている人もいます。

しかし、記憶が、思考に対して弊害になるのは、その記憶が徹底していないときです。つまり生兵法の記憶、一夜漬けの記憶のときに記憶が弊害になるのです。消化され自分のものになった記憶は、思考を深める役割があります。

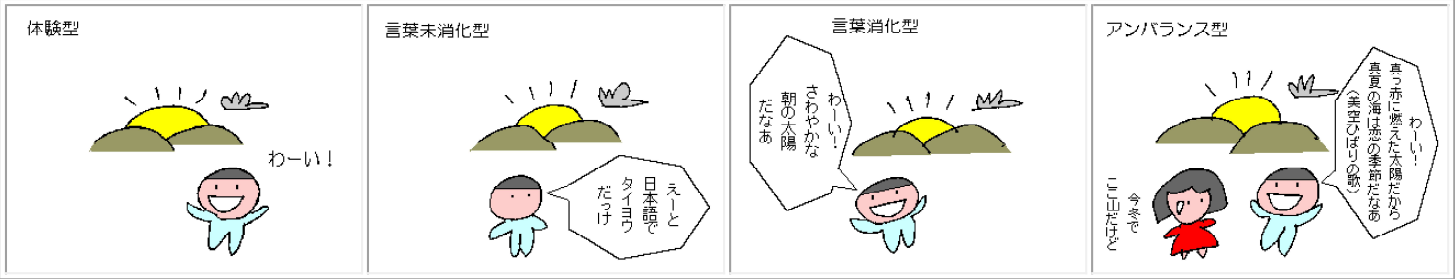
例えば、九九というものを考えてみるとわかるように、ほとんどの人は、九九を消化しているので記憶による弊害というものを感ぜません。しかし、九九を覚えていてるときは、九九を使うことによって実感よりも劣る面が出ていたこともあったのです。

お菓子を分ける（九九もうろ覚えのときは、体験のブレーキとなることがあります）



同様に、言葉も、覚えかけのときの言葉は、実感よりも劣る面があります。未消化の言葉によって、体験がかえって浅くなる時期があるのです。しかし、言葉が消化されたあとは、体験は言葉によって深くなります。

さわやかな朝（言葉は体験の内容を豊かにしますが、体験が不足していると言葉が先行してしまうこともあります）



暗唱は、言葉による物の見方感じ方考え方を蓄積することです。

しかしもちろん、暗唱以外にも、言葉を蓄積する方法はあります。例えば、たくさん話を聞くこと、たくさん本を読むことです。多くの話を聞いたり多くの本を読んだりすることによって同じ文章に触れる機会を増やすことができます。つまり、同じ文章や同じ文脈に何度も触れることによって、理解するための言葉が表現するための言葉になっていくのです。

この表現語彙と理解語彙には、大きな違いがあります。例えば、英語を読む力を10とすると、ほとんどの人の英語を書く力は1程度のはずです。誰でも名作を読んで感動することができますが、同じような名作を書ける人はほとんどいません。理解語彙のレベルと表現語彙のレベルは大きく異なるのです。

消化された表現語彙を蓄積する方法として、日本人は暗唱というやり方があることを知っていました。九九、百人一首、いろはガルト、素読などは、日本人が開発した教育の方法でした。

しかし、この百人一首などに見られるような記憶反復の伝統は、戦後急速に失われ、それまでの記憶や反復の学習に取って代わったものは理解と思考の教育でした。ところが、理解と思考の教育は、一斉指導と結びついていたために教える側の負担が大きく基礎学力の低下を生み出しました。その学力低下を補うものとして、公文式や百ます計算のような記憶反復の方法が登場したのです。しかし、新しい記憶反復の方法は歴史が浅かったために、その方法が万能であるかのような行き過ぎも生み出しました。

この記憶反復の方法と理解思考の方法を統合するのが、読書、作文、暗唱を結びつけた学習です。

暗唱の本当の目的は、記憶ではありません。勉強を進めるための目安として覚えることを目標にしていますが、覚えることそのものは決して重要なことではありません。記憶力を高めることや記憶量を増やすことは、暗唱の副産物にすぎません。

この記憶の副産物に関して、世間では、暗記や暗唱を役立つ知識や文化的な伝統に結びつけようとする傾向があります。例えば、「〇〇の首都は□□」というような知識を増やすような暗記や、平家物語や枕草子の一部を覚えるような暗唱です。

暗唱を表現語彙として役立てようとするのであれば、自分がこれから書く作文に結びつくような現代文の事実文、説明文、意見文を中心に暗唱していく必要があります。

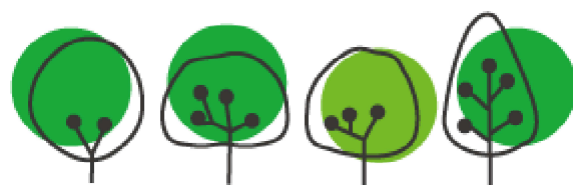
暗唱の真の目的は、反復練習によって物事を把握する力をつけることです。塙保己一が般若心経約300字を毎日100回ずつ1000日間暗唱し、しかも晩年にいたるまで折に触れて暗唱を続けたということを見てもわかるように、宗教的な面を抜きにすれば、これは決して単なる記憶の練習だったわけではありません。将来この暗唱の仕組みが脳科学的に解明されるようになると思いますが、当面は暗唱の目的は、記憶よりも理解や思考の方にあると考えておくことが大事です。事実、大人の人が暗唱を始めると、記憶力がよくなるということよりも、発想が豊かになるという感覚を持つことが多いと思います。

ただし、どの学習にもバランスは必要です。言語と経験の間にもバランスというものがあります。ルソーは、子供時代に本を読みすぎて自分が言語先行型の人間になったことへの反省から、自然教育の「エミール」を著しました。体験が伴わない時期に言語を吸収しすぎると、やはりバランスが崩れる場合があります。もちろん体験ばかり広がって言語が伴わない生活はあまり人間的とは言えませんが、言語が経験よりも大きくなることもやはり人間的な成長とは言えません。

言葉の森の暗唱の自習は1日10分程度ですから、このようなアンバランスを生み出す心配はありませんが、日常生活の心がけとして、言語的な学習と並行して家の手伝いや自然との触れ合いなど経験の時間を増やしていくことは大事です。

●暗唱に関するQ&A

- Q** 学校での音読の宿題と重なるので、子供が嫌がってしまいます。
- A** 学校の宿題は夕方の家庭学習の時間にやり、言葉の森の自習は早朝にやるようにしてください。時間が離れていれば負担に感じません。
- Q** 低学年なので、100字でも読むのにすごく時間がかかります。
- A** 時間はかかってもかまいません。気長に決めた回数だけ音読してください。
- Q** 決められた回数まで音読しても覚えられません。
- A** 覚えることが目的ではありません。決められた回数だけ音読できればそれでよしとしてください。
- Q** 「している」を「してる」などと間違っ自分なりに読んでいます。
- A** 注意のしすぎにならない程度に、ときどき正しい読み方を教えてあげてください。
- Q** 声を出さずに読んでいます。
- A** 声を出した方が頭に残りやすいと教えてあげてください。自分にだけ聞こえる小さい声でかまいません。
- Q** ふざけて早口で読んでいます。
- A** ふざけるのも早口も一向にかまいません。楽しく読んでください。
- Q** 子供にとって意味がわからない難しい言葉があります。
- A** 何度も読んでいうちに子供自身から質問が出てきますから、そのときはお父さんやお母さんが手短かに教えてあげてください。自分で辞書を引いて調べさせるという考え方もありますが、暗唱の定着を目的としているときはできるだけほかの作業はさせない方が続けやすくなります。
- Q** つっかえながら読むので、とても近くで聞いてもらえません。
- A** そういうときこそ、読み終えたときに、「じょうずに読めるようになってきたね」と褒めてあげてください。
- Q** 数回読むと簡単に覚えてしまうので、それ以上続けて読む気になりません。
- A** 覚えることが目的ではありません。スポーツの準備運動で行うランニングと同じものでくりかえすことで体力がついてきます。
- Q** 長いので、とても覚えられるようになるという気がしません。
- A** 歌を覚えるのと同じです。かなり長い歌詞でも歌なら自然に覚えてしまいます。
- Q** 暗記よりも考える力が大事だと聞いたことがあります。
- A** 弊害があるのは、中途半端な暗記や低レベルの暗記です。本格的な暗唱は考える力を高めます。
- Q** 暗唱だけして、課題の長文の音読をしていません。
- A** できれば、毎週の課題の長文を中心に長文を1編音読し、そのあと暗唱の長文で暗唱をしてください。しかし、両方できない場合は、とりあえず暗唱だけをしっかりとできるようにしてください。
- Q** 録音したものを聴く形で、暗唱の代わりにになりますか。
- A** ある程度はなります。しかし、録音には機器や準備が必要ですが、音読には不要です。また、自分で声に出したものの方が定着しやすくなります。
- Q** 1日のうちに朝、昼、晩と何回も暗唱をして、先に進みたいのですが。
- A** いい心がけです。どんどんやってください。ただし、何かを新しく始めたとき子供は飛ばしすぎる傾向がありますから、親の方でコントロールしてあげてください。
- Q** 英語や社会や古文で暗唱の宿題がありますが、同じようにできますか。
- A** 同じやり方で簡単にできます。
- Q** 寝る前に覚えた方が記憶に残ると聞きました。
- A** 寝る前に覚えた方が定着します。しかし、大事なのは毎日の継続です。生活の中で毎日確保できる時間帯でやってください。その意味で朝食前の時間帯をすすめています。
- Q** 文章が長くなると、最初に覚えたものを忘れてしまいます。
- A** イメージ記憶を使えば忘れにくくなります。
- Q** 1回覚えた900字の文章は、ずっと覚えていた方がいいのですか。
- A** 自分の好きな文章であればそうしてください。しかし、普通は、次の900字の文章を覚えるときは、前の文章はもう忘れてかまいません。
- Q** 暗唱を親の私もやってみたいのですが。
- A** 大人では、更に発想が豊かになるという効果があります。しかし、子供と一緒に始めると親が先に挫折したときに説得力がなくなりますから、続けられる自信がつくまではひとりでやってください。



「三月のものを再掲しています。」

1 いまから五千年くらい昔のことです。文明がさかえはじめたころの人々は、夜空を見上げて、宇宙というのは、自分たちの住んでいるこの地球だけだと思っていた。2 きらめく星は、空という高い天井にはりついていて、太陽も月も、空にはりついて動いて行き、しずむと地面の下を通ってまた東にいくと考えていたのです。ギリシャ時代になって、宇宙のしくみが考えられるようになりました。3 二世紀頃に活躍した天文学者プトレマイオスは、天動説という考えを唱えました。それは、地球が宇宙の中心にあつて、そのまわりを太陽や月や惑星がぐるぐる回り、いちばん外側に恒星があるという考え方です。4 まだ、望遠鏡も発明されていない時代のこの考え方は、その後千年もの間人々に信じられました。十六世紀になって、地球が宇宙の中心という考え方に異議を唱えたのは、ポーランドの天文学者コペルニクスでした。5 コペルニクスの考え方は、宇宙の中心は太陽で、地球と惑星は太陽のまわりを円形の軌道にそって回っているというものでした。地球の方が動いていると考えられたことから、地動説と呼ばれています。6 はじめて望遠鏡を使って星を見たのは十七世紀、イタリアのガリレオ・ガリレイでした。ガリレオは望遠鏡によって、月のクレーターや太陽の黒点などをつぎつぎと発見しました。ニュートンが「万有引力の法則」を発見すると、惑星の動きはもつと正確にわかるようになりました。7 万有引力の法則では、すべてのものはたがいに引き合っていると考えられました。そこで、月と地球、地球と太陽もたがいに引かれ合っていて、まわりを回ることができるのです。しかし、その時もまだ、宇宙の中心は太陽で、宇宙とは太陽系のことでした。

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 (

8 十八世紀になり、イギリスの天文学者ノーシコルによって、宇宙は恒星の世界までひろがり、銀河系というものがわかるようになってきました。私たちの地球の位置が、銀河系の中のひとつになったのです。9 二十世紀に入ると、すぐれた技術の望遠鏡が次々と開発され、恒星までの距離を測ることができるようになりました。この観測のおかげで、銀河系の大きさも、銀河系の中のさまざまな天体のことも、そして銀河系以外の銀河、さらに宇宙全体のすがたまでもがわかるようになってきたのです。0 人間の見る世界は、どんどん広がっていきます。やがて宇宙の大きさも超えて広がっていくのかもしれない。

ことば もりちやうぶんくせい いんかい
言葉の森長文作成委員会（と）

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 :

【1】二月三日に節分です。はくたちに豆まきをしました。
「鬼は外、福は内。」

と、元気よく大声をあげました。パラパラと豆が散らばります。おも
しろくてどんどん投げました。ベランダから外に投げるときは、
ちよつとだけ声を小さくしました。【2】どうしてかという、夜なので
大声をあげると近所迷惑になるからです。

「豆の片付けはチップにやらせるからじゃんやんまいていいよ。」
と、お母さんが笑いながら言いました。チップというのはぼくの家の
犬です。【3】まいた豆は食いしんぼうのチップがきれいに食べてしま
います。

豆まきのあと、ぼくがお父さんとお母さんに年の数だけ豆を配りま
した。

「お父さんは三十一歳だから三十一個ね。はい。」
そう言ってお父さんの前に豆を置きました。【4】お母さんには、

「はい、お母さんは三十四個ね。」

と、三十四個数えました。

「いいなあ、こんなにいっぱい。」

と、ぼくがうらやましそうに言う、

「いいでしょう。」

と、お母さんはにつこりました。【5】お母さんが、

「年の数だけとって食べるんだよ。」

と言うので、ぼくと弟たちは自分で豆を取りました。ぼくは六個で
リヨウタは五個。キヨウタは四個のはずでした。でも、ぼくはキヨウ
タが四個以上口に入れているのを見てしまいました。【6】キヨウタのや
つ、それじゃあぼくより年上じゃないかと思いました。リヨウタは
ちゃんと五個だけ食べていました。ぼくも六個だけ食べました。ぼく
とリヨウタは真面目だと思いました。

99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 (

みんなに配ってからもまだ豆は残りました。【7】残った豆はぼくが
作った紙の箱に入れてテーブルの上に置いておきました。その豆を、
お父さんが食べていました。次から次へと豆を口に放り込んでいま
す。まるで豆の方からお父さんの口にふつ飛んでくるみたいです。【8】
おもしろそうなのでぼくも真似してぼくばくと食べてしまいました。
だからぼくも年の数よりも食べてしまいました。どうして年の数だけ
食べるのかなあと不思議に思いました。豆がきらいな人はどうするの
かなと心配になります。【9】年の数だけ食べるのじゃなくて、はじめか
ら好きなだけ食べることにしたいらいいと思います。

ふと、おじいちゃんとおばあちゃんの顔を思い出しました。

「じいとはあは六十個も豆を食べたのかな。」

と、お母さんに聞いてみました。【10】お母さんは、

「さあ、どうかな。今度、電話で聞いてみたらいいんじゃない。」

と言って笑いました。

(原作 しゅんのすけ 編集 言葉の森長文作成委員会 E)

132 131 130 129 128 127 126 125 124 123 122 121 120 119 118 117 116 115 114 113 112 111 110 109 108 107 106 105 104 103 10:

「もっと厳しく注意して……」とは言うが

体験学習のお母さんから、「もっと厳しく注意してほしい」という要望をときどき受けます。しかし、それは、無条件にお断りしています（笑）。

厳しく注意すればよくなるという発想に、実はもっと大きな問題があるのです。

注意したり直したりして作文がうまくなるのであれば、すぐにみんな作文が上手になっています。しかし、作文指導に熱心な先生に教わると、注意したり直したりする指導が増える結果、作文が嫌いになる子が多くなるのです。

作文を書くときに、「間違った書き方をして叱られたい」と思いながら書く子はいません。みなそれぞれ一生懸命に書いています。

提出するときも、「さあ、今日は何を注意されるかなあ」と期待しながら出す子はいません。やはり、いいところを見て褒められたいと思いながら作文を出すのです。

だから、基本は褒めることです。注意したり叱ったりするのは、意識的にさぼっているときだけです。

では、欠点はどうしたら直るのでしょうか。

第一は、読む力をつけることです。読む力がつければ、欠点は一言の注意で直ります。

第二に、そのために、長続きすることを優先し、楽しく勉強することです。

したがって、家庭でお母さんがすることは、間違いを注意することではなく、いつもよいところを見て褒めて、そのかわり、毎日の読む勉強としての暗唱や読書は妥協せずに続けることです。

この逆の人、つまり、毎日の暗唱や読書の自習はせずに、作文の欠点だけを直すというやり方をする人が多いのです。

子供が小学校低学年のときは、だれでも親の言うことを素直に聞きます。その時期に、親が勉強をやらせすぎると、大きくなって子供は親の言うことを聞かなくなります。

子供が素直に言うことを聞く年齢であればあるほど、勉強に関しては甘く、しつけに関してだけ厳しくという姿勢が大事です。（ただし、その場合のしつけも、最小限のものです。例えば、あいさつをする、返事は「はい」と言う、くつをそろえる、イスをしまう、食事中はテレビを見ない、何でも正直に言う、などそれぞれの家庭でルールとして決めたことだけです）

このやり方で子育てをすれば、親はいつもにこにこしていただけるし、子供はいつも楽しく生活ができるのです。

「三月のものを再掲しています。」

1 夏休みの友といえはやはりカブトムシです。昆虫の王様と呼ぶにふさわしいその姿は、子どもたちの視線をとらえてはなりません。ペットショップのカブトムシコーナーは、毎年黒山の人だかりができていますし、採集ツアーも登場するほどです。

2 いかににも丈夫そうな姿のカブトムシですが、その命はそれほど長いものではありません。卵からかえり、冬を越した幼虫は、蛹へと姿を変え、夏になると成虫、つまりカブトムシへと変身します。が、成虫になつてからの命はおよそ一か月ほどといわれています。

3 ですから、夏休みが終わるころは、ちょうどカブトムシの命もつきる時期にあたるのです。クワガタムシも、カブトムシと並んで人気があります。カブトムシがひと夏の命なのに対して、クワガタムシの場合、種類によっては越冬できるものもあります。えつとうれしくなつてしまふでしょう。

4 大切に育てていたカブトムシの死は悲しいものですが、死んでしまったからといってすぐに飼育ケースを処分してはいけません。ケースの中の腐葉土をそつとのぞいてみましょう。もしかしたら、小さな卵が見つかるかもしれません。**5** 直径三ミリ程度の白くて丸い卵です。孵化直前の卵は大きさは五ミリ程度になり、色も黄色味を帯びてきます。この卵をじょうずに育てることができたら、大切にしていたカブトムシの二世と対面できる日がやってくるのです。

6 卵からかえつた幼虫は、おもに腐葉土を食べて大きくなります。幼虫時代に摂取した栄養が、成虫のカブトムシの大きさを決定付けます。いったん成虫になつてしまつたら、どんなに樹液を吸つたところでそれ以上大きくはなりません。

7 正折な大きさのカブトムシに、幼虫時代に十分な栄養を取つていたのです。もしも人間がカブトムシと同じ性質だつたらどうでしょう。成人したらいくら食べても太らないわけですから、ダイエットに励んでいる大人にとつてはなんともうらやましい話です。

8 通常、一匹の幼虫が蛹になるまでに食べる腐葉土の量は、洗面器に山盛り一杯分にもなるそうです。カブトムシは、そんな大量の腐葉土をかぶつとむしやむしや食べてしまうのです。さすがに昆虫の王者、驚いてしまいます。

9 友達に自慢できるくらい大きなカブトムシを育てるためには、良質な腐葉土を絶えず補充してあげることが大切です。また、飼育ケースの中のフンを取り除いたり、掃除をしたり、根気よく世話を続けることが必要です。

0 では、カブトムシとクワガタムシでは、どちらが強いでしょうか。カブトムシの得意技は、カブト割りでしょう。クワガタムシの得意技は、もちろんクワ固めです。結果は、カブトもクワガタも、お互いをムシして引き分けになりました。

ことば もりちようぶんさくせいいいんかい
言葉の森長文作成委員会 (c)

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 (

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 :

1 分退のE曜日に、お父さんと和倉川スケートリンクへ行きまし
た。私はこの日をとても楽しみにしていました。テレビでフィギュア
スケートを見て、すっかりスケートのファンになりました。フィギュ
アスケートは絶対に見逃しません。2 お母さんは、
「どうしてあんなことができるのだろうね。」

と不思議そうです。私も不思議に思うけれど、練習したらできるか
も知れないと思っています。だから、一度でもいいからスケートをやっ
てみたかったです。

3 お父さんは、学生のころにアイスホッケーをしていたそうです。
私がスケートに行きたいと言ったら、
「お父さんが教えてあげるよ。」

と、得意そうに言いました。そして、来月の日曜に行こうと約束して
くれました。

4 スケート場に着くと、すぐにスケート靴を借りました。白い靴
です。わくわくしながら履いてみると、思っていたよりも重くて窮屈
でした。まるでペンギンのような歩き方でスケートリンクまで歩きま
した。

5 「よし、滑ってみようか。ゆっくりおいで。」

と、お父さんが氷の上で待っています。おそろおそろ氷の上に乗っ
てみました。お父さんの手を握るよりも先につると尻もちをついて
しまいました。ほんの一瞬の出来事です。

6 「こんなに滑るんだ。ああ、びっくりした。」

と、照れながら言うと、お父さんは、
「すぐに慣れるさ。お父さんと手をつないで練習だ。」

と、私を起こしてくれました。お父さんに引張られながらもなんとか
一周しました。7 何度も転びそうになってドキッとしました。二周
目では、少し余裕が出てきました。右、左、右、左と

順番に足を出すことも覚ええました。三周目になると、ちよつと
楽しくなってきました。
「うまい、うまい。コツがわかってきたみたいだね。」

と、お父さんも褒めてくれました。8 お父さんと手をつないで何周
か滑ったあとで、思い切って一人だけで滑ってみることにしました。
深呼吸をして、

「できる、できる、絶対できる。」

と、自分に言い聞かせました。スーッと右足を出して、次はスーッと
左足。とてもゆっくりだけど、私の体は進みました。

9 「すごいぞう。やったな。」

お父さんの声が聞こえます。お父さんの顔を見ようと顔を上げた
瞬間、また尻もちをついてしまいました。でも、痛くありません。ど

うしてかというど滑れたことが嬉しくて痛さも吹っ飛んでしまったか
らです。10 その後、何度も転びながら練習しました。時々お父さん
がひとりです。私は、うっとりしながら眺めました。私も早くあ
んなふうになれるようになります。

(言葉の森長文作成委員会 ㊟)

99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 (

132 131 130 129 128 127 126 125 124 123 122 121 120 119 118 117 116 115 114 113 112 111 110 109 108 107 106 105 104 103 10:

子供のころの暗唱が理解力を育てる

教室が休みなので、この1、2ヶ月読みっぱなしだった本を再読しました。普段、付箋をつけながら読んでいたので、その付箋の箇所だけ飛ばし読みをしていけば、再読したことになります。再読するときにメモを取りながら読んでいき、そのメモもまた再読すれば、同じ本を3回読んだことと同じになります。

再読しメモをとると、自分が一度読んだはずなのに、その本の中身がいかにか定着していないかよくわかります。定着率はS字曲線を描くようです。感覚的に言うと、1回読んだだけだと定着率は20%ほどで、2回読むと50%ほどになり、3回読むと60%ほどになるという感じでしょうか。

ところで、この定着率が1回目から高い人がいます。昔の人で言うと、南方熊楠や塙保己一です。塙保己一は、盲目でありながら、一度読んでもらった本の中身は全部自分の頭に入ったようです。頭の中に、それまでに読んでもらった本のデータベースができていたので、独力で群書類従のような大事業ができたのです。

この定着率の高さは、生まれつきというよりも、幼少期の学習法にあるような気がします。その学習法とは、同じ文章を繰り返し音読するという一種の暗唱の練習ではないかと思います。塙保己一は、18歳のときに般若心経を毎日100回ずつ1000日間暗唱しました。その般若心経の暗唱自体にも効果があったと思いますが、そういう修行を思いつく土台として、それまでに文章を暗唱する練習をしていたのではないかと考えられます。

そこで、そういう記憶力が抜群だった人を何人か思い出して調べてみました。ひとりは安岡正篤です。安岡正篤は、東洋の古典に精通しており、政治家や財界人にそのときどきの時局に応じた的確なアドバイスを与えた人です。

調べてみると、安岡正篤は、少年時代に四書五経の素読をしていました。1898年（明治31年）生まれですから、その当時はみんなが素読をしていたのではないかと思うかもしれませんが、そうではありません。湯川秀樹も、子供のころ四書五経の素読をしていましたが、湯川秀樹は1907年（明治40年）の生まれで、その当時家庭で素読をするようなところはほかになかったと述べています。

江戸時代に寺子屋で大勢の子供が集まって行う素読に比べて、家庭でひとりで静かに行う素読は、かなり徹底したものだったでしょう。その素読が、その後の学習の定着率に影響したのではないかと思います。

もうひとりは、コンピューター付きブルドーザーを言われた田中角栄です。田中角栄も、一度聞いたことを確実に覚えていたことで有名です。調べてみると、田中角栄は、少年時代、吃音を治すために浪花節の練習をしたそうです。つまり、浪花節を何度も音読して暗唱していたということです。

記憶力というのは、ただ覚えているだけの力のように思われていますが、その記憶した知識をそのときどきの必要に応じて自由に使えるという場合、それは記憶力というよりも定着力と言った方がよいでしょう。定着力の高い人は、本を1回読んだだけでも、内容のほとんどを自分のものにできる人です。こういう定着力は、言い換えれば理解力です。

暗唱のように、同じ文章を繰り返し音読し身につけることによって、その暗唱した文章だけでなく、その後の学習全体に通用する理解力が育つのだと思います。